

第2講：異文化伝道論 1—イスラームの宣教活動に学ぶ

天理大学人文学部准教授

澤井 真 Makoto Sawai

天理教とイスラームの歴史的交錯

天理教とイスラームの邂逅についての公式の記録として、1926（大正15）年の中国巡教における中山正善2代真柱によるモスク（清真寺）訪問がある。日本で最初に建設された神戸モスクが、1935年の建設であったことを踏まえば、2代真柱は日本国内に暮らす天理教の信仰者に先駆けていち早くイスラームを体感し、その信仰生活について詳細に学ぶ機会を得ていたことがわかる。2代真柱はその後、1943（昭和18）年に「海外伝道に関する後方の参謀機関」としての役割を期待し、天理教亜細亜文化研究所（現・おやさと研究所）を創設された。

インドネシア布教にみるイスラームとの軋轢

第2次世界大戦以前の南方布教（インドネシア布教）は、瓶田スカによるジャワ島教会の設立に代表されるように積極的に布教が行われた。しかしながら、大戦の勃発と敗戦を機に、東南アジアにおける布教の歩みは一旦途絶を余儀なくされた。

戦後、「論達第二号」の発布を受けて天理大学は建学の精神に立ち返り、伝道課程の開設や海外伝道同志会の結成など、海外布教の人材育成に活気づいた。その後のインドネシア布教の歩みから、イスラーム圏での布教の実態を窺い知ることができる。

天理大学を卒業後、天理教海外布教伝道部（現・海外部）で勤務した谷口忠三の回顧によると、U氏は第2次世界大戦後にインドネシア独立戦争に参加、その後も日本に戻らず現地に定着した。日本に一時帰国して修養科で学んだ後、インドネシアへ戻りスマトラ島で診療所を開設、教えを聞き分けた方に対しておさづけの理を取り次ぐなど布教を展開した。一方、現地出身の妻は周囲からの迫害を恐れ、毎月の講社祭では、おつとめが始まると、隣室でラジオのボリュームを上げておつとめの声をかき消そうとしたという。

現地の熱心なムスリム家庭に下宿した谷口は、生活すべてに密着したイスラームへの伝道の至難さを体験した。たとえば、谷口を見かけるとすぐにお道の教理について尋ねてくるムスリムがいたが、自らの天理教の教理の理解不足やイスラームの知識不足から、「教義論争に敗北を喫する」ことが多かった。こうした経験を経て、谷口はイスラームが常に他宗教とのディベートで優位に立つ努力を重ねてきたことを体感した。同時に、彼は世界宗教として、天理教の神観、人間観、世界観、救済論について、信仰者自身が教理の研鑽を主体的に行う必要性を痛感した。

イスラームにおける「^{ダアワ}宣教」の概念と歴史的展開

イスラームにおける宣教は、アラビア語で「招くこと、呼びかけること」を意味する「ダアワ」（da'wah）の概念に基づく。聖典クルアーンにおいて、非ムスリムに信仰を呼びかける行為はムスリムの信仰的義務とされる。クルアーンには「英知と良い話し方で、あなたの主の道に招け」（16章125節）など、神の道や善へと向かうよう呼びかける言葉が頻出する。

歴史的には「コーランか剣か」という過酷な二者択一の側面も確かに存在したが、実際には人頭税（ジズヤ）を納めれば庇護民（ズィンミー）として一定の信仰の継続が認められた。また、

近代以前に組織的な宣教団体が遠方へ派遣された事例はほとんどなく、東南アジア等への拡大には、主としてムスリム商人や移住者の交易・交流、そして神秘主義の修道団（タリーカ）の活動を通じた現地化・土着化のプロセスがあった。その際、現地の風習（アダト）と宗教的行為（ディーン）を区別し、固有の習慣といかに折り合いをつけるかという、軋轢のなかでの融合の模索が常に続けられてきた。

宣教の縦と横—イスラームの結婚と宗教教育—

イスラームは信仰継承の仕組みを完全にシステム化している。現在、世界のムスリム人口は約19億人に達し、高い出生率による自然増だけでなく、結婚・出産に伴う改宗・入信もまたムスリム人口の増加を支えている。イスラーム法に基づき、ムスリム男性はユダヤ教やキリスト教といった一神教の女性との結婚は可能であるが、その逆は認められていない。また非ムスリム男性がムスリム女性と結婚する場合は、イスラームへの改宗が必須となる。さらに、生まれてくる子供は自動的に「父の宗教」を受け継ぐものとされ、法的・システムのムスリムとして登録される。このように、家庭・地域・学校を通じた強固な宗教教育の仕組みにより、他宗教への改宗は事実上選択肢にない。

シンガポールのように、民事婚（ROM）とムスリム婚（ROMM）を法律上区別し、非ムスリムが改宗せず結婚することを例外的に認める国もあるが、統計を見ても、非ムスリム側が改宗するケースが大多数を占める。逆にイスラームからの改宗には家族との絶縁や身の危険が伴うこともある。そのため、そうした改宗者を迎え入れる宗教団体側は親族や家族には知られない物理的状況（空間）を作り出すとともに、世代（時間）をかけて受け入れていく体制が求められる。

「をや」を知らせる天理教学の展望

クルアーンには、「アッラーは、自存され、御産みなさらないし、御産れになられたのではない。」（112章2～3節）と記されており、神と人間の間を「をやと子」として説くことは決してない。これは、人間を我が子として救済し導こうとされる親神天理王命の神観とは決定的に異なる。

イスラームを唯一絶対の真理と信じ、他宗教に真理を認めないムスリムのような強固な信仰世界を持つ相手に対し、信仰者自身が醸し出す雰囲気や情緒的なアプローチだけでは教えは伝わらない。彼らと対話し、お道を伝えていくためには、自らの教えをさらに深く掘り下げ、論理的に説明できる確固たる「教理の深化」が必要となる。

さらに、他宗教との邂逅や対話を通じて得られる知見を吸収しながら、現代社会において展開する広い意味での天理教学（天理教教義学）を構築していくことが、今まさに求められている。この意味で、おやさと研究所は、「後方の参謀機関」としての枠組みを超えて、教えの体系的整備とさらなる掘り下げを行う唯一無二の機関として、これからの異文化伝道において極めて重要な役割を担っている。